

パリのめぐり逢わせ

関 一 敏
(昭和 51 年修士修了)

2年ぶりにあう先生をオルリー空港に迎えたのは昭和54年9月2日の夜のことだった。8月25日から9月2日までヴェニスで国際宗教社会学会に出るから、という便りを貰っていた。パリに二泊して、4日にロンドン経由で日本に帰る予定だった。ヴェニスの宿屋の住所が書いてあったの

で、空港に迎えにあがりますからと返事を書いた。あとで分ったのだが、この手紙はうまく届かなかったらしい。

ヴェニス19時発のアリタリアAZ 340便は、ほぼ定刻どおり20時35分頃に到着した。フランス人やイタリア人や、あまり見分けのつかない人

人がぞろぞろ出てくるのを見ながら、妙に照れくさくて、かなわない気がした。だいぶ乗客が出てきたあたりに見なれた先生の姿があった。少し離れた柱の陰から「先生！」と呼ぶと、「お」とか「ん」という風に顔を上げた。その表情は何か云いたげにみえた。ぼくの手をしっかりと両手で握りしめると、「タクシーを」と口ごもるように云った。ああ、先生もこんなに懐しがってくれている、と思えば胸もいっぱいになって、しっかりとその手を握り返したのだった。

「ホテルの住所が……」と先生は突然云うのだった。「メモをなくした」。

ホテルのことは先生の手紙に書いてあった。オペラ通りからサントノレ街に少し入ったところにある、星数の多い小ぢんまりしたホテルだった。ぼくの下宿からまっすぐシャンゼリゼを下ってチュイルリー公園をぬけたところ、地下鉄でいうとパレ・ロワイヤルの近くだった。

翌朝、ホテルのそばでネクタイをひとつ先生が買い、ルーヴル入口のカフェで一緒に簡単な朝食をとった。何処か行きたいところがあれば、という、パンダを、という。パリ東端、ヴァンセンヌの森には動物園がある。ああ、あそこにはオセアニア・アフリカ博物館もあって、ニューカレドニア、オーストラリアや西アフリカの仮面と祭具が陳列してあるから。いやつまり、わたしはパンダを見たいと先生は重ねていうのだった。

知り合いに車をたのんで、ヴァンセンヌに出かけた。動物園は入ってすぐの扇状の敷地にパンダがいる。広々とした野外をゆうゆうと歩きまわっている。園内を奥のほうに入っていくと、不思議に哲学的な鳥に出会った。背をこごめて、一羽しずかに片足立ちしている。あれは、と暫くして先生は云った。脇本さんによく似ている。猛獣のオリのそばにコンクリートで固めた展望台があった。てっぺんまでのぼると広大な森と郊外の家々が波

うつようにみえた。先生は体を堅くしている。ほら、下をみて、あんなに小さくみえる。すると、先生はさらに体を堅くして云った。高い所はどうもいけない。残念ながら、この時の写真は露出オーバーで証拠にならない。パンダを背にした先生との記念写真も、ピントはパンダにあっていた。

ヴァンセンヌの森から、パリをはさんで反対側のはずれにあるブローニュの森に出た。大きな池のなかに島があり、渡しを使って「島々」という名のカフェに入る。うす曇りの空を日が沈んで、夕闇につつまれた頃、森を出て賑やかなシャンゼリゼにむかった。日本料理「サントリー」での夕食は、留学満2年になるぼくには有難く嬉しく幸福な時間だった。ほしいものを好きなだけ遠慮せず、と先生はいい、ぼくはたべた。その夜は酔いざましにシャンゼリゼからコンコルド広場、リヴォリ通りを2人でぶらついてホテルに帰った。街路樹やオダリスクの前で、ASA 400 ですからフラッシュなしで大丈夫と云ってポーズをとってもらったりしたが、あとでみたら真黒に写っていた。

翌4日、オペラ座の裏のほうにある「春に」という名の百貨店で布地などのおみやげを買ったあとで、先生はロンドンに発った。3日の間、勉強の話はほとんどしなかったと思う。ただ何処だかのカフェで「博士論文は……」と尋ねるともなく先生が云い、返事のしようもなく何やら口ごもった記憶がある。

数日後、バンシュやラルドやらの鉄道旅行にぼくは出発した。入れちがいに、竹沢尚一郎君がパリに到着した。かれはアフリカの夢（と当時はみえた）を実現しようとしていた。どうも竹沢と行き違いになりそうです、とこれも何処だかのカフェでいったら、先生は「うーん」と唸っただけだった。